

畑作用具シッピキ・追補

田中裕子

はじめに

畑作用具シッピキについては、当館の調査研究報告第6号（平成5年3月発行）で、『麦の畝間をかいまみる ― 畑作用具・シッピキについて ―』として、初めて報告をした。その後、周囲の方々の協力を得て、幸手市の事例（註1）や北埼玉郡大利根町の事例など3例を新たに見出すことができた。こうしてみると、まだまだ調査次第では実例の増加が予測されるが、情報を整理するためにも、ここで、これまでの新たな事例を追加補足して簡単にまとめておきたいと思う。

また調査をすすめるうちに、水田裏作で小麦を栽培する際に使用するというマネヒキなる農具も出現した。「マネヒキ」は、その名称が人の記憶におぼろげながら残っていることを紹介したことがあったが（註2）、今回の「マネヒキ」は、北川辺町で使用していた「ひったて鋤」（註3）とよく似た形態のものである。これも合わせて紹介することにしたい。

1. 幸手市の事例

シッピキは、幸手市にも存在した。幸手市は、市街の東側を流れる江戸川を境に千葉県と隣あっていて、埼玉県の中なかでも東端に位置している。市内を流れる古利根川・庄内古川および古い流路跡には、これらに沿って自然堤防が発達している。シッピキが使用されていたという同市上高野は、古利根川の自然堤防上という地理的な条件のもと、日光東照宮へ参詣するための歴史的にも重要な街道、御成道のすぐ東側にあたる地区である。

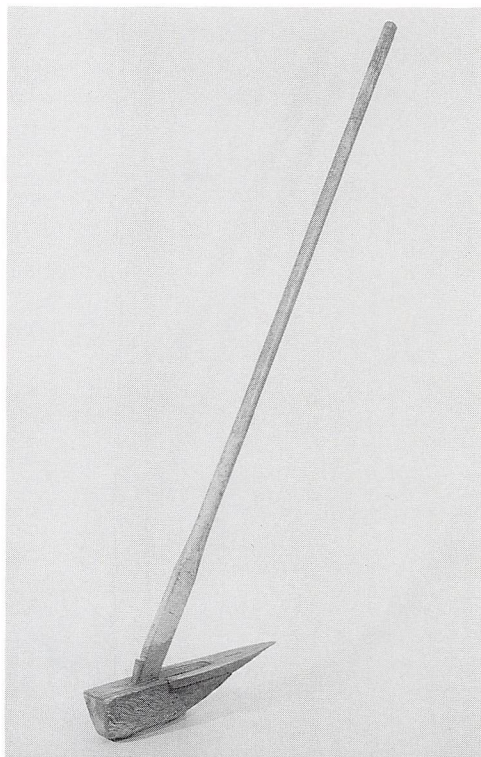
この情報は、同市の市史編纂委員である大久根茂氏から教えていただいたもので、以下は、私自身が当地に赴いての聞き書き調査である。

【話者】

小林 繁さん（明治40年生まれ）
ふじさん（明治44年生まれ）

小林家では、水田のほかに桑畑を含んだ畑を有し、さらに養蚕を手がけていた。同家は、地域の農業振興に多大な功績を残したということで、数々の表彰を受けている家柄でもある。

ところで、シッピキグワ（サクイレグワとも表現して



シッピキグワ（幸手市）

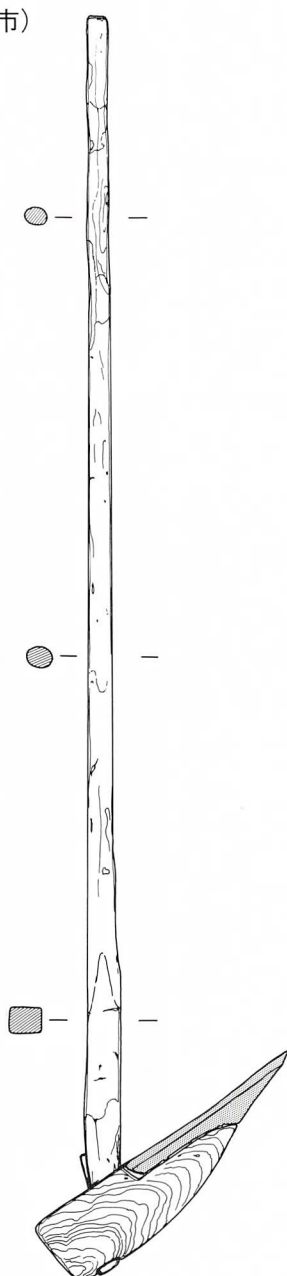
いた)は、話者が幼少の頃から見ているという話から、明治末～大正初め頃にはすでに使用していたものと考えられる。小林家の分家でも使っていたということだが、周囲の農家がどこでも使用していたのかというとそうでもなかったようだ。むしろ、あまり所有例は無かったようである。高価な農具だったということで、それが一因なのかもしれない。

シッピーキを使うのは5月中旬頃である。畑の麦(大麦)が、あかばしってきて(=実が入りはじめて)、その畝間に蒔きものをするときである。シッピーキでシッピーキいてサクをきり、大豆を蒔いたり、オカブ(陸稻)を蒔いたりした。小麦は大麦に比べて収穫が遅いということである。シッピーキの無い人は、普通の鋤を使っていたが、扱いにくそうだったという。

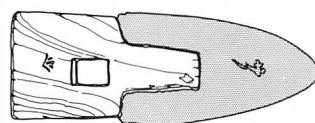


エンガの刻印
(北武蔵の農具B2-1)

▷シッピーキグワ(幸手市)



材 質	柄は樫、杉、鉄(鋳物)
全 長	154.3 cm
柄の長さ	143.2 cm
柄の最大円周	10.1 cm
握り部分円周	9.3 cm
柄の角度	56度
刃床部全長	38.0 cm
刃最大幅	14.2 cm
刃最大厚	9.1 cm
総重量	2.29 kg



0 10cm

今の畑は、野菜畑になってしまったので、シッピーキを使うほどではない。また、かつての「畑」も陸田に変えてから、畝間に作物を作らなくなったので、次第にシッピーキは使わなくなってしまったそうだ。

畑を陸田化することは戦後に行われた。畑では雑草がよくでて草取りに手間がかかったこと、またオカブ（陸稲）は日照りに弱く収穫も少ない。そこで、「畑を陸田に変えよう。」という話が持ち上がった。そうすれば水稻が作付けできるというので、この動きは当時の食糧増産の政策とも合致して陸田化は奨励されていたのだという。

しかし、初めての試みであるために村の大部分の人々は、畑に水を引くことに尻込みしがちであった。小林家だけが、まず4反分くらいを陸田にした。うまい具合に成功したが、こうするまでには畑に井戸をつき揚水機を設置するなど、どうしても資金が必要となるので、やはり敬遠されがちであったようだ。

それでも、同家で成功した例を、近隣の市町村の人々がよく視察にきたものだという。

小林家は、地域でモーターをいち早く取り入れるなど進歩的であった。繁さんは、子どもが生まれ家事の負担が大きくなった奥さんを気遣って、労働力の削減に努めてくれたのだという。

当資料の刃床部ほぼ中央に刻印してある「サノ」の銘は、当館収蔵の重要有形民俗文化財「北武蔵の農具」のうち、エンガ（耕作用具B 2-1 行田市下中条で採集）の刃先に使われている鋳物部分の刻印と酷似している。幸手市と行田市で同じ鋳物屋から農具を購入していることになるのであろうか。

栃木県佐野市は、有名な天明鋳物の産地であるが、この「サノ」は佐野のことであるのか、今のところ不明であるが、購入先を知る手がかりになればと思う次第である。他に、床部と柄にそれぞれ「小」の焼印がある。

2. 大利根町の事例

大利根町の耕地は、利根川と中川に挟まれた低地のために水田がほとんどであるが、昭和30年代半ばから、従来畑地となっていた自然堤防上の耕地を陸田化するようになり、昭和35年から45年の10年間には水田が376ha増加し、畑が423ha減少しているところである。ここは、はじめてシッピーキを見出したところであり、今回も同町琴寄下組で1軒の家から、さらに2件の事例を加えることができた。

以下は、当地での聞き書き調査である。

【話者】

小林 利一さん（大正8年生まれ）

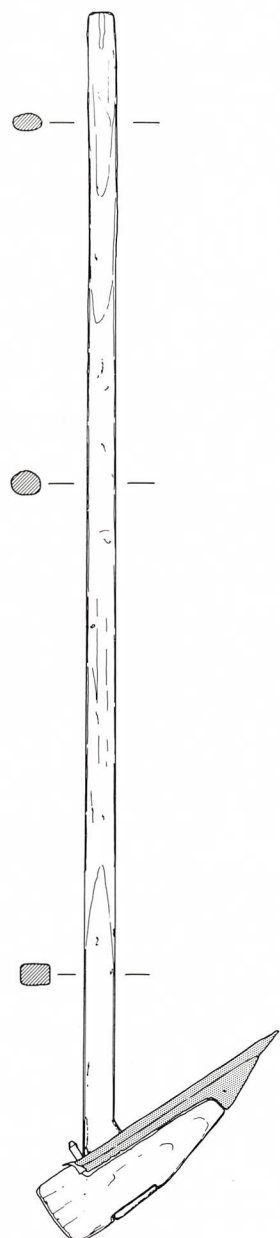
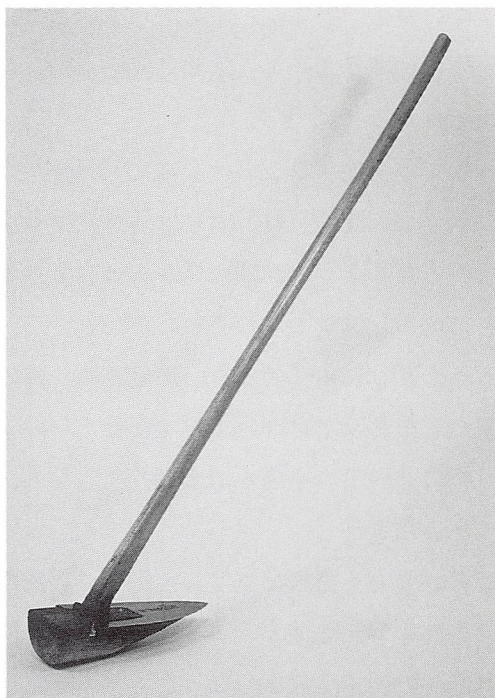
話者は、この地で長く農業に従事し、農作業の細部にわたって詳しいだけでなく、現在でも自分で育てた蕎麦で年越し蕎麦を打ち、綿をつみ綿くりをして手製の布団を作る人である。道具をとて大切に扱い手入れを怠ることが無いので、同家のシッピーキは、刃先など新品同様である。

今回貴重な話をうかがうとともに、シッピーキの使用風景として昨年8月には蕎麦蒔きの様子を調査させていただいた。

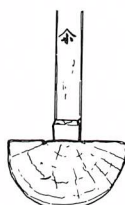
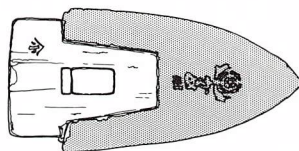
このシッピーキは、利一氏の父親菊蔵氏（明治31年生まれ）が、注文して作らせたものらしい。明治期から長く使用していたものを、大正時代に一度修理しているということである。

油がしみていることでも分かるとおおり、手入れが行き届いていて全体にとっても綺麗である。床部の底には角ばった段差があり、背面から見ると柄が少し左側に反っている。床部と柄にそれぞれ「小」の焼印があり、刃の部分に「かめ田」の刻印がある。

▷シッピーキ（大和根町）



材 質	モクエ 榎? 樫?, 鉄(鋳物)
全 長	143.2 cm
柄 の 長 さ	133.9 cm
柄の最大円周	12.0 cm
握り部分円周	9.0 cm
柄 の 角 度	60度
刃床部全長	34.3 cm
刃 最 大 幅	17.2 cm
刃 最 大 厚	7.1 cm
総 重 量	2.47 kg

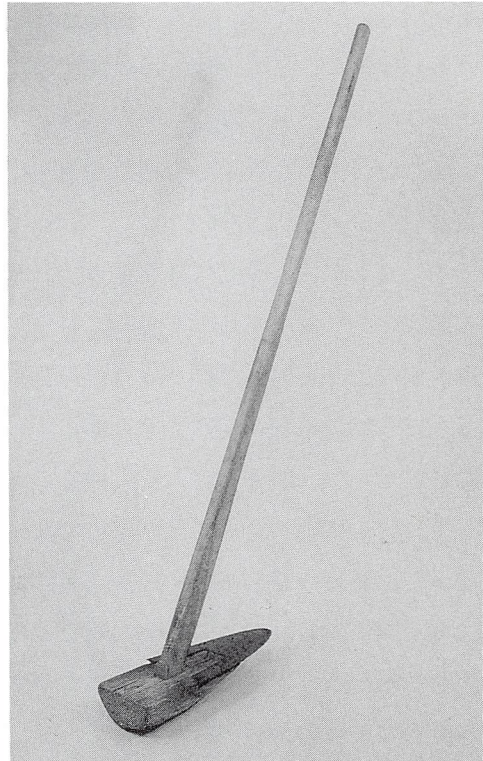


0 10 cm

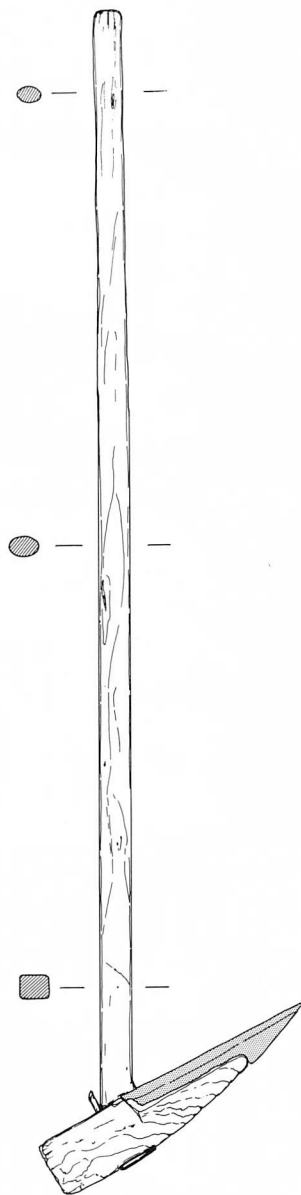
このシッピーキは、数年前に小林氏が隣家から譲り受けたものである。既に不要になっていた農具とともに廃棄寸前のところであったという。その後は、自分のシッピーキは使用してもこれを使ったことは無いそうである。

床の底部は杉材を使用していることもあって、背面からみて右側にあたる部分の傷みが激しい。床部は、比較的薄くなだらかで段差は無い。用途はほぼ同様。

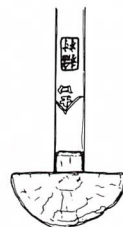
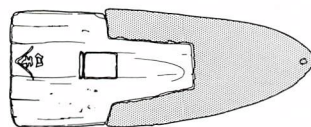
柄に「吉」「稲村」、床部に「吉」の焼印がある。



▷シッピーキ (大利根町)



材 質	櫛 杉、鉄(鋳物)
全 長	142.8 cm
柄 の 長 さ	133.6 cm
柄の最大円周	11.0 cm
握り部分円周	10.0 cm
柄 の 角 度	60度
刃床部全長	37.2 cm
刃 最 大 幅	14.7 cm
刃 最 大 厚	6.6 cm
総 重 量	1.91 kg



0 10 cm

現在でもシッピーキは、蕎麦の種蒔きに使用されている。残念なことに、蕎麦は畝間には作らないということで、本来の効能(?)のほどは見られなかったが、平地に以下の要領で蕎麦の種蒔きを実施している。

まず、サクを切る線上に縄を張って、それに沿って男性がシッピーキでサクを切っていく。

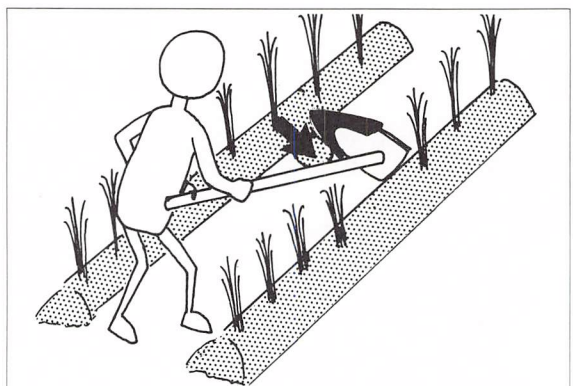
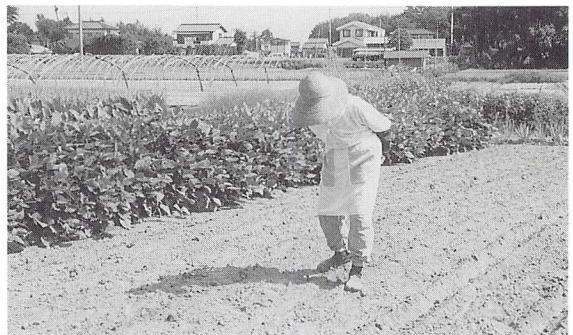
鍬の柄の上方を両手で軽く持ち、刃をやや立てるようにして後退しながらサクを切っていく。土質が軽いせいも、淡々と歩みを止めることなくスムーズに切っていく。その後を追って女性が前進しながら、蕎麦の種を蒔いていく。男性が向こう側に着く頃に、女性がこちら側に着くように、息を合わせる。そうすると、縄を1本ずつずらして張り直していくのに好都合だからである。畝間の作業では縄は不要となる。

土掛けは、足を逆ハの字にして、前進しながら足を中央に寄せて土を掛けていく。畝間であれば、のちに述べるように、シッピーキで掛けていったのだという。

本来シッピーキは、畝間に蒔きものをする時の筋付けに使用した。「引っぱるだけで畝が立つ」ので便利な道具である。特に、生育中の作物を傷つけることなく、楽に仕事のできたので重宝な農具であった。

かつて、畑では麦の畝間に、大豆・陸稲・サツマイモなどを植えていた。蕎麦や綿は、畝間には作らなかったという。5月下旬頃、大麦が赤らんできたら、陸稲を蒔く時期といわれていた。この時に、大きく育った大麦の畝間のサク切りにシッピーキがその実力を発揮したのである。陸稲間の草取りは大変だったという。

また、このシッピーキを土掛けにも使用していたことが今回明らかになった。鍬床を横に傾けて引くと、麦の株にとめぎりにして寄せてある土を刃先が削りとり、シッピーキの縁が、いい具合に下り



た土を撫でて平らにしてくれるという。実際の作業をまだ実見していないので、ぜひとも記録に残しておきたいものである。シッピーキは、筋付けだけでなく、土を掛けるのにも重宝な道具だったのである。

大利根町でも、陸田化は昭和35、6年頃から始まった。陸田になって水稻を作るようになってからは、他の地域と同様にシッピーキは使用しなくなった。一方、そのころの水田は湿田で一毛作だったが、やがて暗渠排水をして、裏作に小麦を作る二毛作が始まった。今はその二毛作もやめて、一毛作になっている。このように水田で、水稻と小麦を作るようになったので、畑ではなおさら野菜を作付けるようになっていったようである。盛んだった養蚕も、畑を陸田に変える際に桑の木を抜いてしまったために、養蚕も徐々にやめてしまったということである。

同町では、写真を提示してシッピーキの所在を尋ねると、ほとんどの人がこの農具について知っているようである。ただし、実際に現在も所有している人は少ない。「麦の中に陸稲を蒔くのにこれでしっぴいて、種と肥料をくれて土をかけた。桑畑を陸田にしたんだよ。」という話も聞ける。ほとんどが10年ほど前に処分したということだが、まだまだ今後の調査次第で資料数が増加することが期待できそうである。

3. これまでの事例一覧

これまでのシッピーキ6点について、表を作成して整理してみた。

おおまかには、全長が140cmほどであること、刃床部の全長も40cmほどであることは共通している。それに対して刃床部の厚さは、磨耗していることがあるので、5.0cm～11.0cmとばらつきがみられた。重量は2～3kgのあいだで、シッピーキ以外の農具と比較してもやはり重い農具であるということがいえる。刃先は、土が付着しにくいようにどれも鋳物製である。床部は直接地面と擦れ合うので、木材に櫛や櫛を使用している資料は傷みが少ないが、杉材を使用しているものは、それなりに傷みが激しい。

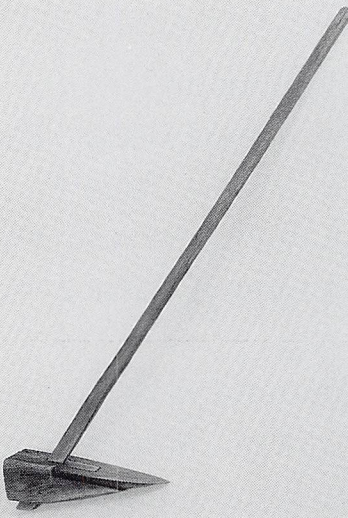
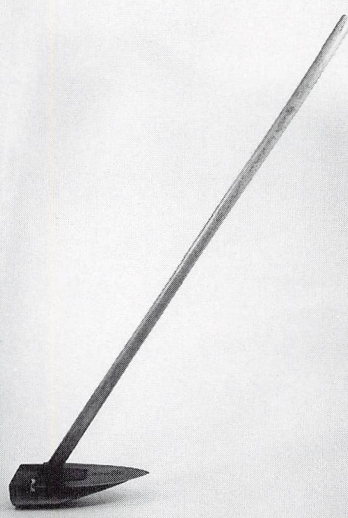
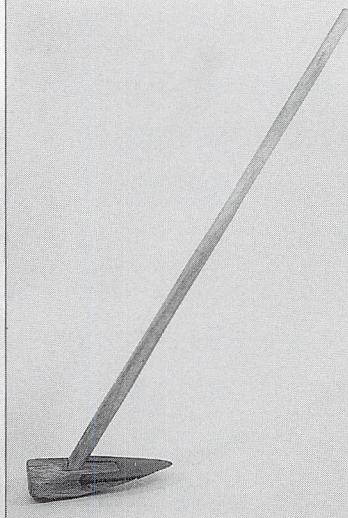
形態を模式的に見てみると、中で特徴があるのが、④のブッタテグワ（北川辺町）である。柄との角度は78度と最も大きく、「仕事を楽にし鋤を安定させるために柄を肩に掛けて使う。」という調書にあるとおり、いかにもその用法に適した形態をしている。「肩にかけて使う」とか神奈川県下に見られるように柄の根元に付けた縄を腰に結んだというような使用例が出るかも知れない。

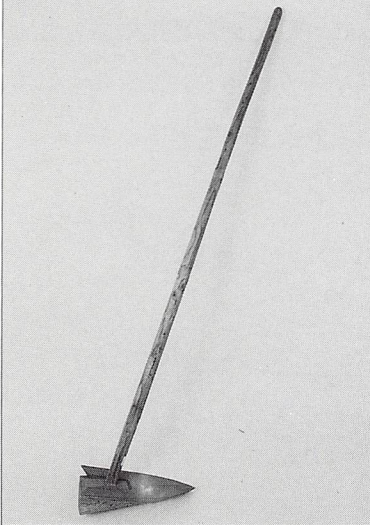
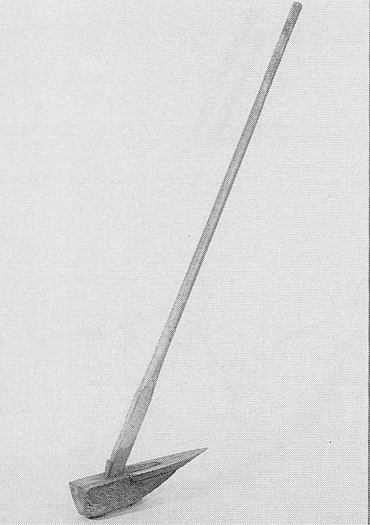
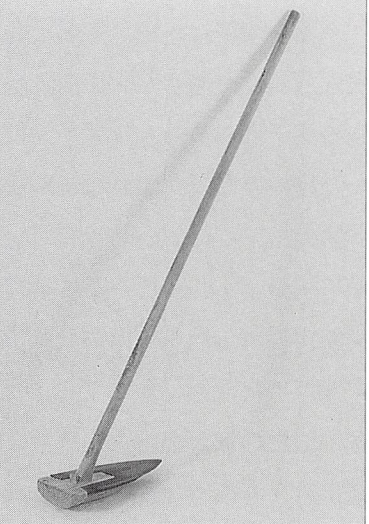
用途で一様にきかれたのは、やはり「麦の畝間に豆を作る時のサクキリに使用する。」ということである。

4. シッピーキ使用地

現在までに確認しているシッピーキはわずかに6点であるが、それらは利根川沿いの地域に点在している。多少無理があるが、ここから、シッピーキが使用されていた地域の傾向を知ることはできないだろうか。

シッピーキの長所を存分に活かすには、畑地の畝間に作物を作る間作用の畝立てが一番である。さらに、耕土が軽い土壌でないと使えない。

No	① シッピーキ(大利根町道目)	② シッピーキ(大利根町琴寄)	③ シッピーキ(大利根町琴寄)
写真			
法	全 長 139.0cm 柄の長さ 124.8cm 刃床部 全 長 37.5cm 〃 最大幅 16.4cm 〃 最大厚 11.0cm	全 長 143.2cm 柄の長さ 133.9cm 刃床部 全 長 34.3cm 〃 最大幅 17.2cm 〃 最大厚 7.1cm	全 長 142.8cm 柄の長さ 133.6cm 刃床部 全 長 37.2cm 〃 最大幅 14.7cm 〃 最大厚 6.6cm
柄の角度	66度	60度	60度
重量	2.95kg	2.47kg	1.97kg
材質	榉・鉄(鋳物)	榿・鉄(鋳物)	杉・鉄(鋳物)
用途	麦の畝間に大豆をまく時のサク作りに使用	麦の畝間に大豆や陸稲をまく時のサク作りに使用	同 左
使用年代	大正～昭和30年代	明治～昭和30年代	? ～昭和30年代
備考		鋳物部分「かめ田」の刻印	

No	④ ブッタテグワ(北川辺町)	⑤ シツビキグワ(幸手市上高野)	⑥ スジツケ(行田市北河原)
写真			
法 量	全 長 152.0cm 柄の長さ 143.0cm 刃 床 部 全 長 31.8cm 〃 最大幅 16.2cm 〃 最大厚 8.6cm	全 長 154.3cm 柄の長さ 143.2cm 刃 床 部 全 長 38.0cm 〃 最大幅 14.2cm 〃 最大厚 9.1cm	全 長 140.5cm 柄の長さ 135.5cm 刃 床 部 全 長 33.5cm 〃 最大幅 16.4cm 〃 最大厚 5.0cm
柄の 角度	78 度	56 度	55 度
重 量	2.60 kg	2.29 kg	2.05 kg
材 質	杉・鉄(鋳物)	樫・杉・鉄(鋳物)	樫・杉・鉄(鋳物)
用 途	麦作の間に大豆・小豆などをまく時のサク作りに使用 柄を肩にかける	麦の畝間に大豆や陸稲をまく時のサク作りに使用	小麦の畝間に大豆をまく時のサク作りに使用
使用 年代		大正初期～昭和30年代	明治～昭和40年代
備 考		鋳物部分「サノ」の刻印	鋳物部分に菊花紋の刻印

「畑では陸稲を作っていたが、その畑を陸田に変えた。」という調査結果から、陸稲を栽培していた地域を中心にシッピーキは分布したとも考えられる。

陸稲の栽培は、畑地の多い北足立・入間・大里の各郡に多い。これは、夏期雷雨の多いことや保水性通気性の適した火山灰土壌が広く分布していることなど自然的条件に恵まれている点にある。陸稲は干ばつに対して弱く、収穫量は夏期の降水量によって決定されるからである。もし、シッピーキと陸稲の関連があれば、今後この地域での発見例が増えることになるだろう。

すでに、このシッピーキは「いんが(引鋤)」として、熊本・宮崎両県南部から鹿児島県の大隅半島と薩摩半島北部にかけて、また中国・四国の瀬戸内地方、それに神奈川県茅ヶ崎市・藤沢市・大和市・平塚市・伊勢原市・厚木市・秦野市・大磯市・中井町、さらに広義の利根川左岸地域として栃木県葛生町・茨城県岩井市・竜ヶ崎市・筑波郡谷田部町・新治郡出島町の分布が知られている。(註4)。



シッピーキ分布図

これ以外にも、栃木県足利市や群馬県館林市でも使用されていた。

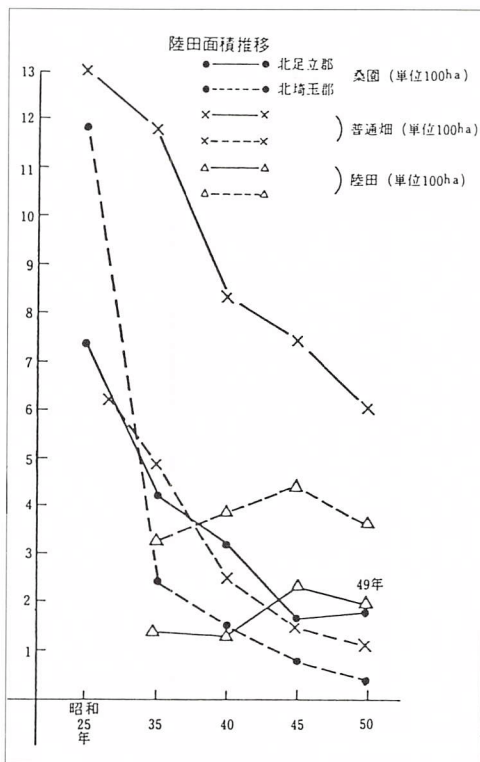
足利市の「サクツケ」と館林市の「サクタテ」は、ここでいうシッピーキと同様で、館林市のもう

1点「ヒッタテ鋤」は北川辺町のそれとよく似ている。用途は、畑地の畝間で使用するという点で同じである(註5)。

このように、これまでよく知られていた利根川左岸地域の分布は濃密で、右岸にあたる当県でもどうやら群馬・栃木・茨城県寄りになりそうである。神奈川県下とのつながりで、当県の南部にその分布が広がることはないのだろうか。今後も、県下の分布状況の把握に努めていくことで、やがて明らかになることであろう。

また「シッピーキは陸田にしてから使わなくなった。」という調査結果から、土地改良の動きの中で、陸田転換の動向から農具の消滅を知ることができるのではないだろうか。

明治・大正期には、洪水の被害を最小限にするため排水の改良に重点が置かれ、昭和期にはかんばつ被害や農業生産力増強等の理由から用水の改良が重視されるよう



陸田面積推移

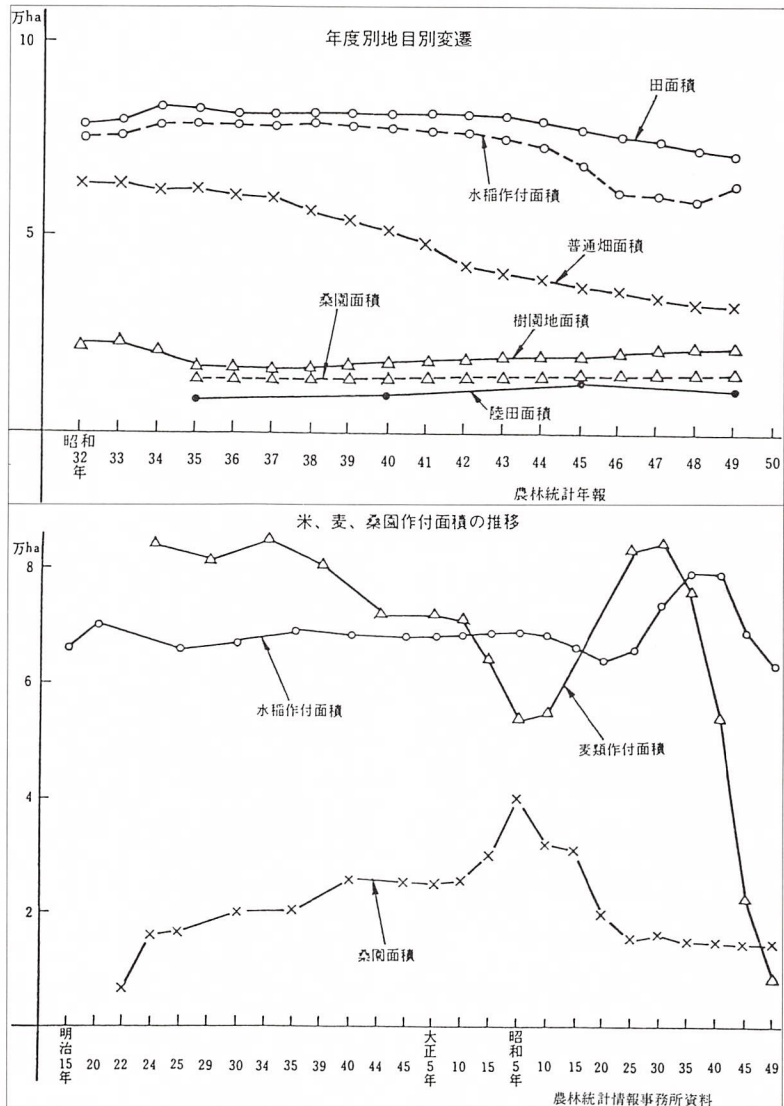
になった。さらに昭和24年に土地改良事業の土台となる「土地改良法」の制定、昭和36年には「農業基本法」制定、さらに、昭和38年に創設されたほ場整備事業（註6）により、土地改良は推進されてきた。これらの事業が実施されていくなかで、用水が充実し畑を陸田に転換することも可能になったのである。大利根町内には、昭和35年に「荒川陸田組合」が発足している。

左図に示した「陸田面積推移」（註7）でもこれを裏付けるように、北足立郡と北埼玉郡では、昭和35年から45年のあいだ普通畑が激減して、陸田面積が増加していることがわかる。右図によっても、全県下でも同様の傾向にあったことを知ることができる。また、水稻の作付け面積が昭和30年代に一時的に急増したことも示されている。しかし、

その後、過剰生産気味の米の需給の均衡を図るために昭和46年度から実施されている稲作転換対策により水稻作付け面積は減少していくことになる。この稲作転換対策（水田利用再編対策）とは、水を溜めて栽培を行うために造成した地目としての水田において、湛水機能を維持しながら過湿を嫌う畑作物を栽培することである。つまり、水田を畑に転換するもので、これを「転換畑」と呼んでいる。

陸田に転換していた頃は、食糧増産を目的に畑地で水稻が生産できるようにしてきたが、米余りから、水田で畑作物を生育するという逆の動きに変わってきているのである。

こうした大きな流れの中で、畑作用具のシッピキは消滅していくことになる。農具が消滅する原因は単なる機械化だけではない。農業政策などの諸条件や、地域の特徴にも目を向けて横の広がりを知るとともに、時代を追うことも重要だということを痛感する。



『埼玉の土地利用』から転載

5. 畑の間作と水田裏作の麦作りについて

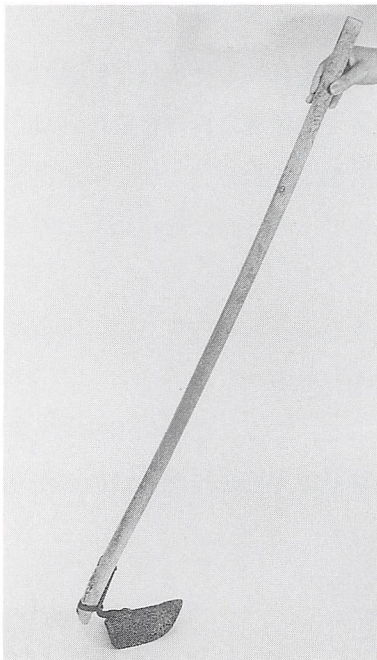
ここでは、水田裏作で小麦を栽培する際に使用するというマネヒキという農具を紹介する。

「マネヒキ」は、稲刈り前の水田で、麦の種を蒔く時に畝間の筋付けに使用する農具である。畑と水田という違いはあるものの、「畝間の筋付け用」とはシッピキと全く同じ用途である。こちらは、イタチマキという農法で、江南町北部の水田地帯では一般的なものだという（註8）。「マネヒキ」は「ウネマヒキ」と音がよく似ており、転訛したものと考えられることはできないだろうか。

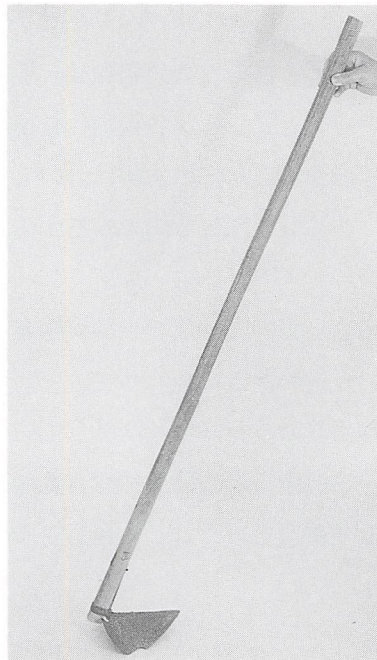
水田裏作については、「稲刈り前にまく場合もあり、このときは稲のサク間にまきつける。稲穂をくぐってまくのでクグリマキ（美里町阿那志）とか、稲穂をさぐるようにしてかきわけてまくのでサグリマキ（春日部市赤沼）、いたちが通るような狭いサク間を通してまくのでイタチマキ（江南町押切）などと呼んでいる。播種後、刈り取った稲をその場に並べ、稲の野干しをしながら麦の発芽を促す方法も取られていた。」（註9）というようなことも分かっている。

その後、妻沼町間々田でもサクツクリという同様の農具を採集した。いずれも、水田で水稻の畝間に小麦を蒔く時のサク切りに使用するという。これを「かりまき」というそうである。

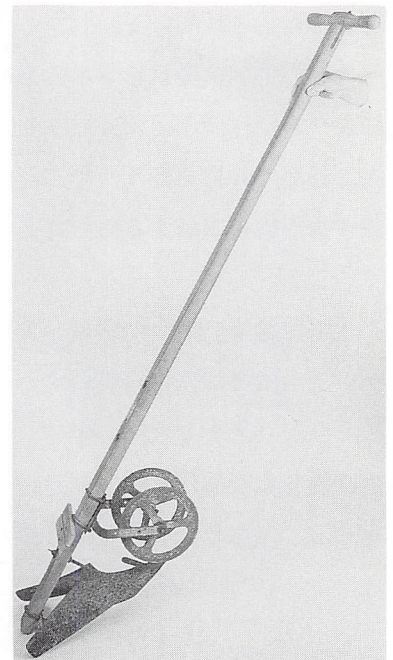
このマネヒキ・サクツクリは、北川辺町で使用していたヒッタテ鍬と形態がよく似ていて、さらに、ここで連想される農具はカルチベータである。これは「明治初年米国とドイツから輸入され、北海道で使用された。本土では、大正時代前期から使用されたが、戦後、にわかに脚光を浴び用途も、中耕、除草、培土のほか、いも類の掘り取りなど万能耕作機として一時代を画したが、昭和35～40年以降は動力機械や除草剤の普及により使用は減少していった。」（註10）という輸入農具である。これに付いている翼開閉調節可能な大培土板は、溝切機（妻沼町間々田でサクヒキと一緒に採集）の刃とよく似ているのである。さらに、カルチベーターには取替え付属品にいくつか刃が付いていてその中にサクヒキに似たものがあるのである。



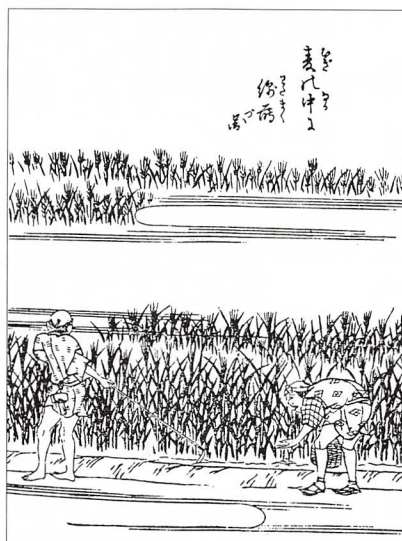
サクツクリ（全長 116.0cm）



サクツクリ（全長 127.2cm）



溝切機（全長 167.3cm）



左：麦の刈株をおこし取、
地ならしして綿をまく図
麦の中へ綿を蒔、其後麦
を刈取て、いまだ株を起
さざる図。

右：麦の中に綿蒔図

これらの、山形を呈した特徴的な刃の形は、戦後カルチベーターが伝わってから、この刃の形に似た農具が出現したのではないだろうか。新しいタイプの農具に思えるのである。事実、「カルチベーターの刃は、余分がいろいろあったので工夫して利用していた。」という人もいる。まだ、推測の域をでないが、マネヒキもこうして生まれたのではないだろうか。

前述した溝切機について簡単に紹介すると、水田裏作の畦立栽培で溝に落ちた土を畦の肩にはね上げるための農具である。同じく水田裏作用の農具なのである。

水田の中でも、湿田に暗渠排水をするなどして乾田にすると、畑として使用することができる。そこで、水田裏作が可能になるのである。この裏作で作るのは、大麦あるいは小麦である。大麦は、蒔くのも刈るのも小麦より少し早いのが、倒れやすく作りにくいという。小麦の方が収穫量があって、商品価値が高かったので小麦を多く作った。また、小麦は、茎がしっかりしているので、刈り取り後しばらくそのままにしておけた。それだから、田植えを済ませた後にゆっくり脱粒するという農作業をやりくりできる利点があったのである。



麦の畝間に綿の種を蒔く（行田市）

さて、行田市渡柳では、麦の間作に陸稲だけでなく綿を作っていたという。その時の使用農具は鍬である。

参考に、大蔵永常著『綿圃要務』（天保4年）から「整地、作条の仕方」の項の書き下し文を載せておく。

「綿を蒔くには、多くのばあい、麦をつくった跡がよい。蒔く時期は、麦の刈り取り以前に、麦の根に寄せて蒔くこと。綿のよく生長する土地では、まず麦を蒔くときに、畦を一尺七、八寸から二尺ほどに切って蒔くこと。また摂州近辺の畑では、一面に地ならしをして、向こう側と手前二尺二寸に印を付け、これに水縄を張り、その縄の根を目印にして、小鍬で引き通り引き通りして筋をつける。その筋の通りを二挺掛けという犁で引けば、その筋を真中にして二筋の溝と畦ができる。この二筋の畦の間はわずか七寸で

ある。そして切った畦の上を、足で踏み付けてゆく、その後から麦を二条に蒔いていき、土をかけておけば、蒔いたとおりに発芽し、次第に生長して穂が出るころは、この幅七寸の条が一畦のように繁る。」

麦の畝間も、奥が深そうである。

ま と め

シッピーキは、畑で小麦を作っていた地域の間作用に使用されていた農具である。しかし、「米の増産」を目指して、畑地は陸田に変わり、水稻が作られるようになった。そうして、シッピーキは使用されなくなったのである。また、湿田も排水設備が整って、水田裏作で田麦が作れるようになった。土地改良事業が充実して生産力は高まったものの、やがて米の生産調整が実施されたり、麦の輸入量が増加したりということから、作付け面積が全体に減ってきているのである。埼玉県は、小麦県で、麦類の作付けは明治から昭和の初めにかけては、水稻の作付け面積を上回っていたが大正10年頃より養蚕経営が最盛になり、養蚕労力と麦作労力が競合し、麦の作付け面積は減少したのである。畑・陸田・水田、小麦・陸稲・水稻、間作・裏作、諸々の条件が微妙に関連しあって変化しながら、その時代に即応した作物を生産してきたのである。

こうした中で、シッピーキは、形態上からも伝統的な農具であると思われる。農業の変遷を知る上でも貴重な農具といえよう。

畑地を灌漑して陸田にした地域がどのくらいあるのか、そこでは使用されていたのか。農具の普及流通の問題や水田裏作の田麦の生産地域の問題などまだ多くの課題が残っている。

拙稿を草するにあたり、大久根 茂氏には前回に引き続き、同氏が幸手市や江南町の調査で採集された貴重な情報を快く提供していただきました。その御好意に深く感謝いたします。

また、多くの方々から貴重なお話をうかがうことができました。あわせてお礼を申し上げる次第です。

小 林 繁 小 林 ふ じ 小 林 利 一 青 木 次 雄
金 子 保 雄 吉 岡 幸 夫 柿 沼 房 夫 (敬称略・順不同)

【註】

註1 大久根 茂氏の御教示による。

註2 拙稿「麦の畝間をかいまみる — 畑作用具シッピーキについて —」(『調査研究報告第6号』埼玉県立さきたま資料館1993年)

註3 前掲書註2に同じ

註4 小川直之「いんが(引鋤)」(『神奈川大学日本常民文化研究所調査報告書第13集民具実測の方法1 — 農具 —』) 平凡社 1988年

註5 柏村祐司氏と野口弥生氏の御教示による。

註6 『'95 埼玉の農業農村整備』 耕地課 1995年

註7 『埼玉の土地改良』 埼玉県土地改良事業団体連合会 昭和52年

註8 大久根 茂氏の御教示による。

註9 『新編埼玉県史 別編1 民俗1』 埼玉県 昭和63年

註10 『写真でみる農具民具』 農林水産技術会議事務局 昭和63年